

2022年4月23日

「何度も話し合い、選択しながら生ききった患者の物語」



 看護師 北村愛美


はじめに

人生の最終段階を迎える人との関わりにおいて自分らしい生活の質を保つことの重要性がある「チューブだらけになっても生きたい」という想いと現実との開きに苦悩しながら生ききった患者と支えた家族との出会いから旅立ちまでの物語を時間の流れに沿って紹介



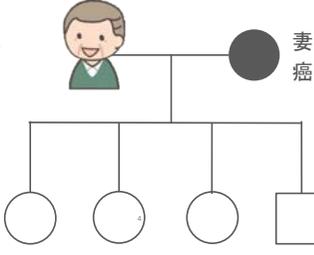
「揺れる想い」と「選択」しながら生ききった姿


在宅ターミナルケアのプロセス

準備期	訪問看護の依頼から開始までの時期
開始期	訪問看護から在宅療養の支援体制がほぼ安定するまでの期間
維持期	病状や症状及び在宅療養の支援体制が比較的安定している時期
悪化期	病状や症状が変化し、必要に応じて支援体制を再構築する時期
臨死期	死が数日以内と予測される時期
死別期	死亡直後からおおむね1年間


ケース紹介

Aさん
80歳代男性
癌末期状態
外来通院
日中独居



妻
癌で他界(自宅で看取り)

長女
他府県在住
妹弟の想いをまとめる

次女・三女
他府県在住
毎日交代で通い
全般的な生活を支える

KP長男
早朝から夜遅くまで仕事



準備期(肉体的に激しい活動は制限されるが歩行可能な状態)

食量低下、呼吸困難などの身体症状が出現
長女より当STに直接電話あり

「何かあった時に、どうしたらいいか助言してほしい。私たち姉弟を助けてほしい」と、訪問看護依頼あり。

訪問看護開始

開始期～維持期(症状は比較的安定)

鎮痛剤や体動に応じた酸素投与量の調整し身体症状安定
訪問看護は定期的な訪問のみ

「(症状を緩和する)薬に頼りたくない」
「ほとんど家で食事をしたことがない。どこに靴下があるか。電子レンジなんて使ったこともないし、冷蔵庫なんか開けたこともなかったです。今はいろんなことができるようになりました(苦笑)」

病状は安定し、家族旅行を楽しむ時間を過ごす

悪化期(トイレに行くことが困難な状態)

倦怠感が強くなり、疼痛も増強
身体症状に伴う予期不安あり
夜間の睡眠もとれない日々が続く

「入院はしたくない」
「なるようにしかならない。けど、少しでも可能性があるなら治療を続けたい。やってもみないことには分からない。先生を信頼しています。先生に会うと安心します。だから病院に行きます」

家族の支えで通院を継続

 悪化期(トイレに行くことが困難な状態)



腫瘍内科医から
「病気の勢いが進行している」
「これ以上抗がん剤を続けるのが厳しい」
Aさんは自ら医師に余命の告知を希望し、
数か月であることを知る

**抗がん剤治療は終了
緩和ケア内科の診察が再開**

 悪化期(トイレに行くことが困難な状態)

症状がゼロにならないため苛々感を
家族にぶつける日々家族も苦悩

さらに、コロナ禍で病院が逼迫、緩和ケア病床の縮小により、
お守りのTカード(在宅療養の継続が困難な際に症状緩和を目的として
入院を受け入れるシステム)を使用できず入院が困難な状況であった

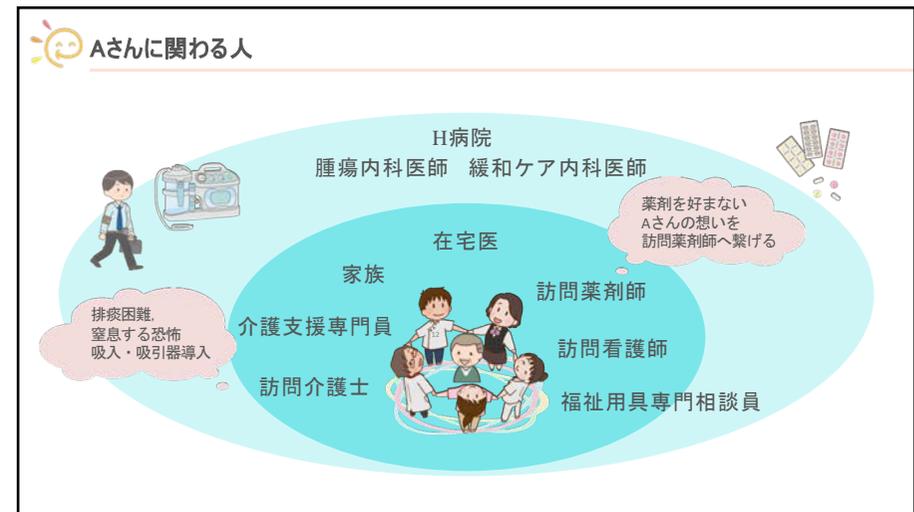
**訪問診療の選択肢について
本人・家族と話し合った**

 悪化期(トイレに行くことが困難な状態)



「病院に行くのは億劫じゃなかった。
けど、辛くなってきた」

訪問診療と訪問薬剤師導入



 悪化期(限られた自分の周りのことしかできない状態)



「人間いつかは死ぬ。それは分かってる。ただ、こんなに医学が進歩してるのに癌が治らないなんて。チューブだらけになっても生きたいんです。新薬が出るのを期待しています」

 悪化期(限られた自分の周りのことしかできない状態)



「母親と違って父親は生きたい人です。できることは全部してほしいです。姉弟でもみんな意見が違います。でも結局は父親が決めます。父親の思っているようにしてほしいんです」

自宅で、できる限りの医療処置を希望

 悪化期(限られた自分の周りのことしかできない状態)



在宅医はメリット・デメリット
効果と副作用など
Aさんの想いをききながら
丁寧に説明



 臨死期



「もうあかんのかなと思う毎日です。『寝る』というのが怖いんです。寝てしまったら、もう目が覚めないんじゃないかと思うと、怖くて。ああ、今日も目が覚めた。『生きててよかった』って思います。いつも考えています。どうしたらいいのかわからない。この子(姉弟)は一人では何にもできません。私がいつも指示してきました。看護師さん、この子にどうしたらいいのかわせてやってください」

 臨死期

次女「日に日に顔色とか変化していると感じています。『ごめんな』『もう逝っていいか』って言うんです(流涙)。父親は次男なんですけど、長男が戦争で他界して、この家を自分が守らないといけないという思いがあったみたいです」



『生きたい』と言った言葉の裏側には
『家を守る』という思いもあった

 臨死期

数日後、家族から呼吸変化の連絡あり。
長女は遠方のため電話の受話器を本人の耳元に当て話しかけてもらった。
Aさんは「よっしゃ」と力強く返事をした後
家族が見守る中旅立つ。


 死別期

家族より「本当に、寝ることや意識がなくなることが怖かったんだと思います。しんどかったと思うけど、父らしく望みを捨てずに頑張ったと思います。でも、先生は何度も来てくださって、的確に説明や指示もしてくださいました。おじいちゃんやおばあちゃん、母も家で代々看取ることができました。本当に、みなさんがいてくれたことが支えでした。ありがとうございました」

 まとめ


最期が穏やかであったのか
患者に問うことはできない

関わる人は
患者の想いを丁寧にきき
患者を支える人に繋げる存在

自分らしく生ききるために
選択をしながら考える過程が何よりも大切